

現代日本における スピリチュアリティについての一考察

A Study on the Spirituality in contemporary Japan

博士後期課程 教養デザイン専攻 2013年度入学

上 田 弓 子

UEDA Yumiko

【論文要旨】

スピリチュアルあるいはスピリチュアリティと呼ばれる事々の流行により、精神世界の思想や異界観もゆるやかに一般化しつつある。その基層には自然に対する日本人の霊性観が存在し、自然界の见えない力の威光は古代アニミズム信仰から現代に至るまで受け継がれている。しかし、近年の「パワースポット巡り」などには、スピリチュアリティ特有の自己完結性が見て取れる。誰でも、「信」や「行」なしで霊的な体験ができ、その真偽は個人の感性に依るとするスピリチュアリティは、宗教体験のいいところ取りともいえよう。ただし、そこには現代の日本人が宗教を忌避する理由も示される。既存宗教に伴う諸制約が取り除かれたスピリチュアリティでは、誰もが聖世界と俗世界の両方を体験できるのである。自然崇拝の感性に仏教的世界観が加わって培われた日本人の精神性は、科学主義による神秘の否定を受けとめつつ、また不可知なものに向かおうとしている。「超越的な力は自らの中にある」という思想的なトレンドは今後も加速するだろう。仮想と現実を越境するスピリチュアリティは、現代の日本で希薄になりつつある精神性領域を補完する存在といえる。

【キーワード】 スピリチュアリティ、精神世界、新霊性文化、自然崇拝、霊性

はじめに

かつて「精神世界」として扱われていた領域は、現代ではスピリチュアリティ（スピリチュアル）という新たなブームを生み出し、「精神世界」に特別な関心をもたない人々にも、身近でポピュラーな存在になりつつある。「癒しをもたらす」というスピリチュアリティの表層のイメー

ジは、汎用性に富んで活用しやすく、医療や健康、芸術、教育、文化などの多方面に拡散させることが可能である。スピリチュアル関連の情報は、出版・放送・ネットなどのマスメディアに幅広く取り上げられ、誰の目にも触れるものとなったが、その一方で、スピリチュアリティの概念は、まだ辞書的には定着していない^(注1)。

そこで、本論は、スピリチュアルあるいはスピリチュアリティと呼ばれる領域が、現代の日本人にとってどのような存在かを明らかにすることを目的とする。まず、「癒し」というニーズに支えられたスピリチュアル市場の現状について解説し、ブームとなった背景を探っていく。次に、これまでの宗教学者による研究をふまえた上で、スピリチュアリティが宗教とは異なる「隠れた知の系譜」であることを述べる。そして、自然に神秘を見出す日本人の「霊性」観を確認しつつ、現代の日本人がスピリチュアリティに求めるものはなにかについて論じていく。

I スピリチュアリティの現状

1. 「スピリチュアル」の流行

今日では、「スピリチュアル」と呼ばれるものは、あらゆる分野で眼にすることができる。たとえば、「守護霊」、「前世」、「オーラ」という特殊な概念が、テレビ番組で一般にも取り上げられるようになり^(注2)、「パワースポット巡り」や「聖地巡礼」と名付けられた旅行は一般誌に特集される。チャネラー^(注3)の元を訪れて神秘的メッセージを得ようとする人もいれば、ヒーラー^(注4)に心身の調整を依頼する人もいる。自分に合うパワーストーンを見立ててもらい、「開運ブレスレッド」をあつらえる人も珍しくない。また、心身のストレスを解消するのに、「アロマテラピー」や「ヒーリング・ミュージック」を用いて非日常を演出し、自分自身で「癒し」を体験する人も増えている。このように、「バラエティ番組」「旅行」「アクセサリ」「療法」「音楽」というありふれた事々が、「スピリチュアル」的な意味が付加されたたん、特別な価値や効果が備わったものへと変貌する。スピリチュアルとはいったいなんだろう。なにか超越的なものに関した、目に見えない世界の事々……、そのような曖昧な輪郭を想定することは可能でも、「これこそがスピリチュアルだ」と言い切れる明確な判断基準はない。「何がスピリチュアルで、何がスピリチュアルではないのか」を区別する具体的な境界線もほとんどないに等しい。こうして、一定の概念規定や、どうアプローチすべきかの統一見解がないまま、「スピリチュアル的なもの」が、どんどん拡散しているのが現状である。このカオス的展開こそがスピリチュアルの特性といえるため、まずは、現状に関して説明をしていきたい。

2. 思想と経済の二側面

スピリチュアリティをどう扱うかに関して、大きくは、次の二つが考えられる。それは、社会的に意味ある現象として思想面から見るか、あるいは個人の実践として実用的なカルチャーととらえるかである。前者にとって、スピリチュアリティは現代の一般心理の流れを読み解く重要な

キーワードとなる。科学万能の時代においては、迷信的・呪術的なものは次第に衰退していくと考えられるのが自然であるが、実際には、「目に見えない世界」への人々の関心は拡大している。この現象は、現代日本人の感性がどこに向かうのかを見るための重要な糸口といえるだろう。また、後者にとってのスピリチュアリティは、心身の健康を支える生活習慣、娯楽やレジャーあるいは芸術に通じる文化の一種と考えられ、それは収益を生み出すビジネス・ツールになり得るのである。

有元裕美子『スピリチュアル市場の研究』によれば、スピリチュアル・ビジネス市場は、2011年現在で、一兆円規模に達すると見られ、「ペット関連市場と同程度、化粧品市場の半分程度に該当する規模」^(注5)とされる。同書では、「その中で市場規模が推計されているのは、携帯占いサイト市場の200億円、ヨガ市場の約1600億円くらいであり、それ以外のカテゴリーは算出根拠となる販売データや統計値が不足しており、正確なところは不明である」^(注6)とある。これは繰り返し述べるようにスピリチュアル領域が曖昧なまま、市場が多方面に拡大しているためである。

同書の図表2-1「スピリチュアル・ビジネスとその関連範囲」(49頁)では、「Ⅰ. スピリチュアル・コンテンツ」が、「Ⅱ. スピリチュアル・コラボレーション」として、商品の価値向上や販促・集客に活用される流れが示され、特異な思想や実践法が、身近な商品やサービスへと転換される展開が見て取れる。また、図表2-3「主なスピリチュアル・ビジネスの利用経験、利用頻度、単価(参考)」(54頁)では、旧来の宗教行事・習慣としての「お賽銭、お布施、寄進など」の利用はアンケート回答者の51.9%、「神社仏閣のおみくじ、お守り、数珠など」は51.1%であるが、比較的新しいスピリチュアル市場といえる「携帯サイト、ゲーム機器などでの占いゲーム」は31.1%、対面での「占い・相談・鑑定」も18.5%が利用すると回答している。これにより、一般消費者のスピリチュアル関連の消費が一般化しつつある現状がうかがえる。スピリチュアル・ビジネス市場の総計は明言できないものの、すでに大規模市場の一つとして成立しつつあるのは確かといえるだろう。

3. 「癒し」の需要に支えられるスピリチュアリティ

以下に、スピリチュアリティ市場が成立した背景について考えてみる。

スピリチュアリティに関連したマーケット、たとえば雑誌の「スピリチュアル」特集記事や関連商品の紹介などでは、「心の癒しとなる」「身体を健やかに保つのに役立つ」というイメージで喧伝されることが多い。そのため、現代の日本人にも、スピリチュアリティは好意的なイメージで受けとめられるようになったと考えられる。

1998年、世界保健機関(WHO)において、「健康」の定義に「スピリチュアル」の語を用いるかどうかについての提議がなされた。「肉体的(physical)、精神的(mental)、及び社会的(social)に完全な状態」を指すとしていたものを、「肉体的、精神的、霊的(spiritual)、及び社会的に完全な状態」を指すという定義に変更しようという提案が議論されたのである^(注7)。CiNii

で「スピリチュアル」の語を検索すると、看護や福祉や終末医療の分野での論文が目につく。スピリチュアル、あるいはスピリチュアリティを社会的かつ学術的にとらえようとすれば、まだ医療・健康の分野に限られるのが実情といえよう。

その一方で、教育や芸術、カルチャーの現場では、スピリチュアリティに関わるものは徐々に増えつつある。神秘思想に基づく運動としてシュタイナー教育が有名であるが、現代では、スピリチュアリティとの関わりが見られる「ホリスティックな教育」や「いのちの教育」という概念も生まれている。また、「官製スピリチュアル教育」として、文部行政も「目に見えないものを大事にする」教育の方針案を打ち出した経緯がある^(注8)。

芸術分野では、ヒーリングアート、ヒーリングミュージックと呼ばれる「癒し」を目的とした芸術も、カテゴリーの一つとして多くの人々に消費されており、一般的な市場にもスピリチュアル関連商品が違和感なく並んでいる。

このように、生活のあらゆる場面において、人々が「目に見えないもの」に価値を見出し、「癒し」や「心の安らぎ」を積極的に取り入れようとする志向性が、今日のスピリチュアル・ブームを支える原動力となっていることがうかがえる。前述の WHO の提議は、公的、国際的な場面で、「スピリチュアル」が一般的な概念として取り上げられた事例として話題になった。「霊的 (spiritual)」という概念がもはや常識である論拠として、スピリチュアリティを愛好する人たち（以下、スピリチュアリスト）にとっては、市民権を獲得しつつあるという自信を裏付ける出来事といえよう。

4. スピリチュアル・ブームが起こる要因

スピリチュアリティのブームが起こった要因をシンプルに読み解くならば、前世紀に発展した科学的物質主義が行き詰まりを迎えつつあり、人々が「心の平安」の獲得へと価値の視点を移そうとしている点があげられる。直近の出来事として、2011 年 3 月 11 日の震災による津波被害、その後の原発施設の崩壊による放射能汚染への危機感の高まりは象徴的といえる。これは、「科学が万能である」という考えが幻想にしか過ぎないこと、科学への依存がけっして幸福を約束しないことを、現代日本人が痛感したメルクマールの出来事といえるだろう。震災以降、政治や環境や社会に横たわる構造的な課題について、多くの関心が寄せられる一方、個々人としては、よりいっそう「心の平安」や「癒し」の重要さが求められる時代がくと予測される。直接的な被害に遭った人々に必要なのは、医師による治療と長期にわたる心理的なケアである。では、もはや他人事ではない危機を目の当たりにした多くの人々に生じる不安やストレスの解消、つまり、普通の人々が今後を生きていく上での「心の平安」や「癒し」に対しては、いったいなにが有効となるのだろうか。それらは以前ならば宗教によって担われていた分野である。しかし、現代の日本では、既存の宗教、とりわけ教団宗教への関心や関わりが希薄になりつつある。難解で厄介そうな教団宗教の教義にとって代わる、新たな思想が必要とされているというのが実情だろ

う。

今日では、人々の「癒し」へのニーズは、「救済」から「気づきや学び」へと移行しつつある。絶対的なものへの「信仰」によって「救い」が得られるという公式は、先の科学的根拠を求められる時代を経たことで大きく揺らいだ。いまや、人々が不可知で証明できないものを無条件で信じるのは難しい。その代わり、絶対的なものや「全てを乗り越える力」は「自らの中にある」と気づき、目覚めることが重要だという意識上のトレンドの変化は、今後も加速することになるだろう。これは、カール・G・ユングを代表とする近代に発展した自己認識・自己解読につながる心理学が、「目に見えないもの」の領域に影響を与えたことにも由来する。その一例として、スピリチュアリティの中でも、とりわけ西洋占星術の分野では、ユングによる深層心理学の概念を積極的に取り入れようとする動きが顕著である。マギー・ハイド『ユングと占星術』によれば、「無意識の存在があたりまえになっている時代においては、占星家のクライアントは自分たちの深層にある何か、その心理、その心、その魂について知りたいと思っている」(137 頁) のであり、「現代心理学の理論の中でも、深層の意味を求める占星術の願いに即座に答えることができたのは、ユングのアプローチであった」(137 頁) のである。記号と象徴を多用し、科学的な根拠が乏しいともみられる占星術が、「運命」の解釈から「心」の解明へとシフト・チェンジを図ったのは時代の必然である。また、「ユングが、占星術を含め伝統的な叡智には敬意を払っていることも、当時勢いを増しつつあった新しい心理学を自分たちの領域に取り入れようとしていた占星家にとってユングを魅力的に見せた一因だ。」(138 頁) という指摘も、ユングとスピリチュアリティが親和性をもってつながる理由となるだろう。

近年では、神秘性を研究領域内に含んだトランスパーソナル心理学^(注9)も成立し、そこではブームとなったスピリチュアリティの諸概念も取り扱われる。かつては特別な関心を抱く層にのみ信奉されていたスピリチュアルもしくはスピリチュアリティは、学術的な分野でも考察される対象になりつつある。そして、それはいまや普通の人々にとっては、容易に「心の平安」や「癒し」を得ることができる文化的ツールと見なされるのである。このように、スピリチュアリティは、現代日本において希薄となった精神性領域を補完すべく求められ、時代のニーズに応じたかたちで現れてきた現象であると考えられる。

5. 宗教学におけるスピリチュアリティ

スピリチュアリティが一般領域に拡散するにつれ、それは果たして伝統宗教を継ぐものとなり得るのかという問いも生じる。この視点から、宗教学者による研究も増えている。ここでは、スピリチュアリティに関して、現代の宗教研究者たちがどのようなとらえ方をしているかを確認しておく。

伊藤雅之・榎尾直樹・弓山達也は、『スピリチュアリティの社会学』のなかで、スピリチュアリティという用語について、「当事者と超越的次元との関係性に着目することによって、「自己を

超えた何ものかとつながっており、その何ものかが自己の中、および自己と他者との間で働いている感覚（の質）」としてさしあたり定義している。」^(注10)とする。

また、同書では、小池靖の「超自然的な力や存在に自己が影響を受けている感覚」^(注11)や、伊藤雅之の「おもに個々人の体験に重点をおき、当事者が何らかの手の届かない不可知、不可視の存在（たとえば、大自然、宇宙、内なる神／自己意識、特別な人間など）と神秘的なつながりを得て、非日常的な体験をしたり、自己が高められるという感覚をもったりすること」^(注12)というそれまでの定義を紹介した上で、「いわば、超越的な（あるいは自己内在的な）存在や力とのつながりによって、自己変容をもたらす体験や意識、感覚が、スピリチュアリティについての機能的な定義となる」^(注13)としている。ここではスピリチュアリティは、まだ曖昧かつ個人的な「感覚」によるものと見なされるにとどまっている。

その後、現代におけるスピリチュアリティの存在を、総括的に明らかにしたのは、宗教学者の島藺進である。島藺は『スピリチュアリティの興隆 新靈性文化とその周辺』や『精神世界のゆくえ』により、スピリチュアリティ現象を「新靈性運動」あるいは「新靈性文化」と位置づけた。『スピリチュアリティの興隆 新靈性文化とその周辺』の巻頭には、「スピリチュアリティ（靈性）とは、個々人が聖なるものを体験したり、聖なるものとの関わりを生きたりすること、また人間のそのような働きを指す」^(注14)という定義がなされている。島藺は、スピリチュアリティが「1960年代のアメリカ、70年代の先進諸国で、とりあえず既成の宗教伝統や教団組織と対立するような、まとまりをもった現象として出現した」^(注15)とし、それが「1970年代、80年代にニューエイジや精神世界とよばれたもの、あるいは同時期以降、伝統宗教の枠に収まらない新たなスピリチュアリティと見なされてきたものを広く見渡すための用語として、新靈性文化（新靈性運動・文化）を用いる」^(注16)とした。現代日本のスピリチュアリティ、つまり島藺が言う新靈性文化には、日本古来の宗教観も東洋思想も含まれ、ありとあらゆる「知の集積」が行われている。スピリチュアリティには多くの不可知なものが含まれるばかりでなく、それとつながりを持つとする様々な運動や文化も重複かつ混合的に含まれる。スピリチュアリティの分類や把握の困難さに対して、新靈性文化（新靈性運動・文化）というとらえ方は、一つの新たな思想的枠組みを与える画期的なものとなった。島藺以降、現代宗教の研究者たちの大半は、その説に依って、スピリチュアリティを「新靈性主義」として位置づけている。

また、島藺は同書のあとがきのなかで、「新靈性文化が全体としてどのような社会的機能をもつのか、現代社会の公共空間において新靈性文化は何らかの役割を果たすのか、果たすとすればそれはどのような機能であり、役割なのかという問いには深入りしない」^(注17)とし、「評価する前に、現象そのものをよく見ておきたい」^(注18)とも記している。これは、際限なく拡散するスピリチュアリティの現状を踏まえた上では、もっとも誠実な態度であるといえるだろう。スピリチュアリティが単なる消費ブームやサブカルチャーの一種にとどまらず、時代に合った新思想、あるいは伝統宗教からの離脱により生まれた新宗教と見なし得るかについての明言は難しい。多領域

の底流に漂うスピリチュアリティの曖昧な空気感は、細かく分別して定義をするのに適さず、むしろ、どんな領域にも関与することができる点が本領といえる。現代の日本人がスピリチュアリティに惹かれる要因も、まさにこの柔軟さにある。スピリチュアリティを宗教の一種として限定的に語ることは、それらがもつ柔軟さや幅広さの実感から、かえってかけ離れたものとなってしまふおそれがあるだろう。スピリチュアリティが、思想的な運動としてより明確な方向性を持つにはまだ時間がかかるに違いない。その前段階として、「宗教」の意義について、根本的な見直しが求められることもあるだろう。やはり、現在のところは、「スピリチュアリティ」や「スピリチュアル」について、島菌のいう「新霊性運動」あるいは「新霊性主義」という、思想の潮流としてとらえるのが適切であるといえる。

その後、弓山達也は、「日本におけるスピリチュアル教育の可能性」（2010年）において、「スピリチュアリティは教義・儀礼・組織を備えた教団宗教から離れた非制度的かつ個人的な宗教意識のこと」^(注19)と定義した。ここでは、スピリチュアリティは、まだ「宗教」とはいえないものの、「宗教意識」としてみなされる。その根拠として、弓山は鈴木大拙の『日本的霊性』を引いている。曰く、「霊性を宗教意識と言ってよい」^(注20)、「一般に解している宗教は、制度化したもので、個人的宗教体験を土台にして、その上に集団意識的工作を加えたものである。〔中略〕宗教的思想、宗教的儀礼、宗教的秩序、宗教的情念の表象などというものがあっても、それらは必ずしも宗教経験それ自体ではない。霊性はこの自体と関連している」^(注21)である。

以上によるならば、個人的宗教体験と見なすべきスピリチュアリティも、「霊性であり、それは宗教意識である」という位置づけになり得る。意味深いのは、宗教的思想、宗教的儀礼、宗教秩序、宗教的情念の表象などは必ずしも宗教経験それ自体ではないという部分である。このように、「霊性こそが、宗教経験それ自体と関連する」という視点は、現代日本のスピリチュアリティの本質を探る上で、重要なポイントになり得ると考えられる。思想、儀礼、秩序、情念を超えるもの、それが霊性と呼ぶべきものであるなら、「人の魂が感知するもの」と言い換えることも可能であろう。

6. スピリチュアリティのキーワード

これまで、漠然かつ曖昧なものとして言及してきたスピリチュアリティだが、実際にはどのようなものが含まれるのだろうか。スピリチュアリティを明確に定義することは困難でも、スピリチュアル的と思われるものを挙げてみることは可能である。精神世界に関する情報は、これまでもいくつかのガイドブックや書籍によって提供されている。比較的早い時期の1980年には、C+F Communications 編『別冊宝島16 精神世界マップ』（以下、『精神世界マップ』）が出版されており、ここでは「隠れた知の系譜あるいは全宇宙的陰謀の系譜」というチャートが目に入る^(注22)。「隠れた知」とはまさに「オカルト」の意であるが、この本で取り上げられた「精神世界」とは、「自己の精神、あるいは心のメカニズム」の問題であり、社会的な難問が発生する原因は「人

類がその知性の使い方を知らないためだ。いや、その使い方を間違っているためである」とされている。多くの人が、外なる宇宙（コスモス）と内なる宇宙（コスモス）のデザインは同じであることを学ぶことにより、「人類の意識の変容が進行し」ていると示唆する^(注23)。

『精神世界マップ』では、エニアグラム^(注24)の九分類に基づき、「精神療法」「悟りの心理学」「魂とからだの訓練療法」「幻視宇宙学」「環境のデザイン学」「神秘学—アメリカ・ヨーロッパ編」「ニューエイジ・アカデミズム」「伝統をつぐ賢者たち」「神秘学—アジア編」の 카테고리によって章立てがなされている。この九分類は現代日本のスピリチュアリティにおいても、そのまま通用する。同書の内容は散文的で、各分類に関係する理論や言説などが紹介されている。読者はこの一冊を読み進めるうちに、自分の関心と通じ合うものを見出すことになる。しかし、重要となるのは、この『精神世界マップ』に、すでに現在のスピリチュアリティの核ともいえる思想の萌芽がうかがえる点だろう。

いま顕在化しつつあるこの意識は、かつてさまざまな人間が悟りとか、覚醒とか、あるいは神秘体験と呼んだものである。これまで特定の人にしか不可能であるとされてきたものが、より多くの人たちの間でわかち合われるようになったのだ。これは明らかに人類の精神的進化、意識の進化を示すものである。特殊体験でしかなかった悟りの体験が、きわめて日常的な体験となっていく。あなたの中にも、そのような全人類的方向性が存在している。あなたもこの進化という流れを航行する人類と呼ばれる星間物質の一員なのだ。（『精神世界マップ』、8頁）

「覚醒」とは、自己に内在する聖なるものへの気づきである。前文の「特殊体験でしかなかった悟りの体験」とは、修行や儀式を通じて、また教祖や指導者により教化され、教団的なグループ・ワークに参加することによって、はじめて得られるものという前提を意味している。しかし、1980年の『精神世界マップ』発刊時においても、すでにその前提は薄れつつあり、神秘体験が「きわめて日常的な体験となっていく」と示唆されているのは意味深い。その前年の1979年には、占い雑誌『My Birthday』（実業之日本社）、オカルト雑誌『ムー』（学研）が創刊されたこともあり、当時は「目に見えない世界」への関心が高まっていた時期と考えられる。

その32年後となる2012年、スピリチュアリティ解説本の最新刊として、『精神世界の教科書』が出版された。著者の松村潔は神秘学の研究家である。数秘術、エニアグラム、タロット、カバラ、十牛図などに造詣が深く、西洋占星術においては日本を代表する理論解説者といえる。この書籍には、【巻末資料②】（272-317頁）としてキーワードと簡単な解説があげられているが、スピリチュアリティに関連づけが可能となるものが、カテゴリー34項目、558キーワードに分類され、それぞれに簡単な解説がつけられている。しかし、これは必ずしも現存するカテゴリーの全領域を網羅するものではない。たとえば、〈占い〉のカテゴリーでは「西洋占星術、タロット、

ヌメロロジー、ゲマトリア、サビアン、ヘリオセントリック、インド占星術、風水、易、四柱推命、宿曜占星術、気学、トート・タロット、カモワン・タロット、ジオマンシー」があげられているが、一般的に〈占い〉領域を網羅するなら、同程度に認知されている算命学や紫薇斗数が入っていないのには違和感も残る。おそらくは、松村が判断する「スピリチュアリティ」の領域にも一応の判断基準があり、それによる取捨選択がされているのであろう。同様に、個々のキーワードがもつスピリチュアリティとの関連性の深浅の程度も、松村の主観による判断によるものと考えられるが、挙げられたキーワードの量的価値は評価されるべきものといえる。

この本の34カテゴリー、558キーワードをみれば、ほとんど全てが先の『別冊宝島16 精神世界マップ』の九分類に集約させることが可能であり、新たな領域が増えたという印象はない。その代わり、漠然とスピリチュアル的だと思われていたものが、558キーワードとして列挙されたことにより、スピリチュアリティがどのようなものと親和的であるのかがイメージしやすくなる。こうしてみると、スピリチュアリティとは、精神世界、オカルトから直線的に発展したものではなく、あらゆる領域に通底する「隠れた知の系譜」の集積群ととらえることが自然である。

この558キーワードの中には、直接「精神世界」とは結びつかないような単語も含まれる。たとえば、キーワードにある「整体」や「スローフード」などは、一見、精神世界とは無関係な健康関連の領域に属するものである。とはいえ、整体の施術者の個人的体験が極まれば、「理屈では説明できない、なにかの力や作用の働き」を実感する傾向はあるだろう。また、ヨガや瞑想を通じてスピリチュアリティに傾斜していった人たちが、その関心を身体と食とのつながりに向けた結果、「スローフード」の専門家になるということもあり得るはずだ。結局、どんな人の営みも「精神性」と無縁ではありえない。あらゆる営みの奥底に、あるいは志向性の果てに、「隠れた知」の存在を見出すことは起こりえる。そうした「目には見えないなにか」を突き詰めれば、やがては「神秘」や「神」や「摂理」という存在につながるようになっていく。あらゆるものに共通する「隠れた知」こそが、精神世界の実体ともいえるものである。

このように、一見無関係と思われる領域間が、スピリチュアルという思想によって地続きとなる可能性が生まれてくる。スピリチュアリティの領域では、「隠れた知の系譜」が縦横無尽に連結されていくのである。西洋的なものと東洋的なもの、精神論と身体論、カウンセリングと治療、自力での修行と他者によるサポートといった、ありとあらゆるアプローチは自由自在に共鳴しあい、結びあい、複合的な意味を生み出していく。それぞれがもつ異なる歴史や仕組みや方法論を包含しつつ、「隠れた知の系譜」はひとつの大きなまとまりとして浮上しようとしている。

II 日本人の自然崇拜

1. 自然界に見出される霊性

では、日本のスピリチュアリティの本質については、どのようにとらえるべきか。忘れてはならないのは、自然に対する日本人の「霊性」観である。

もともと、神道的感性に仏教の論理性が加わったものが、日本人の精神性の源泉といえる。この神道的感性が、多様なスピリチュアリティを愛好する現代日本人の性質にも、大きく関与している。古代より、日本人の自然への眼差しは、神秘と結びつくことが多い。人の生活を取りまく自然界の森羅万象には、八百万といわれる多くの神が宿ると考えられたのである。山や海や河川の神を祀るために、社が置かれた神社は多いが、神籬（ひもろぎ）^(注25)や磐座（いわくら）^(注26)など、自然物そのものが信仰の対象とされた場所も多数ある。日本人にとっては、ありとあらゆる自然の中に、「神」、すなわち人知を超えた存在が表出されているようである。

たとえば、熱海の来宮神社の御神体は、樹齢2000年を超えるといわれる大楠である。来宮神社のHPには、「テレビ・雑誌等で紹介された国内屈指のパワースポット」と紹介されている^(注27)。このパワーにあやかりうとして全国から多くの参拝客が集まってくるというが、たしかに、長い歴史を生き抜いた巨大な楠木に対して、大いなる生命力や神秘的な魅力を感じる人は少なくないだろう。

また、自然の景観や地形そのものが、宗教的で神聖な場所となり得る。古代の修験道や中世期の密教では、集落から遠く離れた深山は修行の場となった。修行者たちは自然の厳しさの中で自らを鍛錬することにより、呪験力の獲得を目指した。里山から離れた深山は一種の異界と見なされ、修行者たちはそこで日常とは隔絶された時間を過ごす。木々が鬱蒼と茂る森の中で、極限的修行を行うことにより、「死と再生」の神秘を体感するのである。

人工物がほとんどない自然の景観は、非日常的な異界を形成する装置としても有効であるが、それ以上に、自然界に宿る「見えない力」そのものが、超常的な閃きをもたらす存在と見なされた。大自然の事物、あるいは現象には人智を越えた特殊なエネルギーが宿ると信じ、そこから神秘的な力の感受を求めようとする感性は、日本人の精神性にとってなじみあるものといえよう。

2. 自然崇拝の背景

日本は四方を海で囲まれた風土であり、地震・津波・干ばつ・洪水・落雷・土砂崩れ、雪崩など、様々な自然災害が、人々に不安と恐れをもたらしてきた。天災によっていつ誰かが命を落とすかは予測不可能であり、そこから、運命の流れを知り、神仏を味方につけ、幸運を祈ろうとする心の働きも強められる。目には見えない自然の力を恐れ敬い、その怒りを鎮めて、平穏が続くのを祈ろうとするアニミズム的信仰心が、日本人の精神の根底に根づくのは必然といえる。

また、農業主体の島国であれば、豊穡を祈願するための土着的な祭りもあちこちで行われる。人と自然の和合を尊ぶ心が、地域全体で育まれるのである。自然を恐れ、自然に感謝する心が、日本人のメンタリティーの中に生き続けている。

このように、自然環境や地形とそこから生まれた生活習慣が、人々の精神史に与える影響は大きい。自然がもつ「見えない力」の威光は、古代のアニミズム信仰から現代のスピリチュアルに至るまで、精神的な紐帯として受け継がれている。どこにでも何にでも「神聖さ」を見出し、霊

的なパワーを獲得しようとする日本人の志向性は、古来よりの特性といえるだろう。

3. 鎮守の森とパワースポット巡り

近年では、自然環境を維持することの難しさが問われ、なかでも森林の存続が危ぶまれている。森林の存在というのは、古来よりの信仰の背景としても、失ってはならないものである。今でも日本のどこであれ神社を見つけることは容易といえる。社（やしろ）の周りには木々が植えられ、聖域を人目にさらさないような工夫がなされている。まるで、木々の茂みによって「神」の神聖さが守られているかのようである。「鎮守の森」は、神社に付随して参道や拝所を囲むように設定・維持されている森林のことを指すが、大概の神社が本殿の背後に森林が控えるように設計されていることから、もともとは社が先にあったのではなく、地域で尊重されていた森のために社が建てられたとも考えられる。それは先に述べた自然崇拝と聖性尊重を象徴するものといえるだろう。

最近、この「鎮守の森」に注目が集まり、自然本来の森林群の再生に期待が寄せられている。『鎮守の森』の著者である宮脇昭は、土地本来の自然植生の樹木を中心に、その森を構成している多種類の樹種を植樹するという「混植・密植型植樹」を国内外で提唱している。宮脇は、WEB上のエッセイ「木を植える—21世紀の鎮守の森を目指して—」^(注28)の中で、こう述べている。

鎮守の森は、単に地域景観の主役であり、防災林・環境保全林の機能を果たすだけではない。そこには現在の不十分な科学・技術、医学で解明できない本物の自然に対する日本人の畏敬の念、こころのふるさととして奥深いものを持っているのではないか。我々は遠い昔から残し・守り続けてこられた命の森、こころのふるさとである鎮守の森を、新しい産業や科学・技術によって非生物的な材料による画一的な人工環境が地域から地球規模で広がれば広がるほどもう一度見直すべきではないか。

自然とともにある日本人ならではの感性も、森林同様に失われるべきではないものだ。そう考えれば、現代の「パワースポット巡り」や「聖地巡礼」にも、ある種の意義は見出せることになる。スピリチュアルで盛んに取り上げられる「パワースポット巡り」や「聖地巡礼」は、一般にもかなり定着している。トレンドに敏感な世代の旅行目的は、観光から自然の霊性とのふれあいへと変わりつつある。この「パワースポット」とは、大地の力がみなぎる場所を指す流行語である。これには、富士山や熊野三山などの山岳が多く含まれる。また、高千穂や秋芳洞など独特の景観をもつ場所も対象となる。また、スピリチュアリティにおける「聖地」とは、伊勢神宮や出雲大社など日本各地にある参拝可能な神社仏閣を指す。霊能者タレントの江原啓之は、特定の神社仏閣を「スピリチュアル・サンクチュアリ」と称して、雑誌やテレビ番組などで多数紹介している。いずれも、旧来より観光地としても人気が高い場所であるが、改めて「パワースポット」

という付加価値が与えられたことにより、その魅力も広く再認識される結果となる。

森林に囲まれた日本各地の聖域を訪れることで、新時代を生きる日本人の中にも、自然を尊重しようとする意識が広がり、今後も継承されていくことになるだろう。自然環境が靈性の源であるなら、それを守ろうとするエコロジー運動と自然崇拜に基づくスピリチュアリティ的視点が結びつきやすいのも、ごく自然な展開であるといえる。

Ⅲ スピリチュアリティに求められるもの

1. 自己完結する靈的体験

大地の力がみなぎる場所や天空とのつながりを体感できる場所をパワースポットと見立て、そこからエネルギーを得る体験、それが「パワースポット巡り」であるが、そこでは、「自分なりにパワーを感じる」ことや「自分なりに神聖さを感じる」ことが重要とされる。従って、本当に特別なパワーがあるのか、それが効果をもたらすのかといった実証の必要性はほとんど問われない。一般にスピリチュアリティにおいて、現象の真偽や効果の有無などはいっさい問題にされないのである。もともと、「幸福」も「癒し」も、個人の主観によるものである。実践者が「効果を感じた」、「幸福になった」、「奇跡が起こった」と実感できたのならば、そこで完結をみるのが通常である。スピリチュアリティの意義は、「癒し」とそこから得た「気づき」に置かれ、「本当に効果があるのか」という功利的なものからは離れたところにある。

各メディアで紹介される人気のパワースポットとは、もともとは信仰の場であり、自然崇拜が行われていた場所であった。本来は、厳しい修行と深い信心をもってはじめて靈的体験は可能になるものである。しかし、スピリチュアリティはそれを容易に「誰にでもできること」にしてしまう。

古来より、厳しい修行を支えているものは、靈性への「信」に他ならず、厚い信仰心があつてこそ、その結果として、靈験が得られるものと考えられた。過酷な体験であればあるほど、修行としての価値も高まることになる。「信」の深さと自己犠牲の大きさが、修行の成果に比例すると信じられたのである。しかし、スピリチュアリティでは、「信」も「行」もいっさい必要ではなく、誰でも「神聖なるもの」と接点を持つことができるとされる。また、靈的体験の深度は努力の程度や取り組みの真摯さではなく、個人的な感性の有無によると考えられる傾向がある。靈的資質は、芸術を解する審美眼と同様、生来のセンスと見なされつつある。そこには、数値化ができない新たな価値基準が生まれることになる。「靈感があるか、ないか」、つまり、「靈的な感度が高いか、低いか」といったことであるが、それもまた自己完結的なものであり、実証の必要性は問われないのである。

2. 宗教に対するアンチテーゼ

スピリチュアリティの裾野は広く、様々な領域を通じて「靈的な体験」をすることが可能とな

る。パワースポットで自然とふれ合えば、大地や森林の気が得られて、インスピレーションや霊的能力は高まる。また、「聖なる存在」は求めに応じて簡単に現れ、人に貴重なメッセージを与え、そのための方法はいくらでも用意される。スピリチュアリティに関して、「本当に効果があるかどうか」を問うのはナンセンスであり、「霊的能力の有無」というのも、本人の自覚と納得によるところとなる。それらはみな、スピリチュアリティを楽しむための暗黙のルールとされるのである。

スピリチュアリティを愛好し、日常生活の中に、「神秘」や「霊性」を取り入れながらも、決定的な宗教観を持つことは極めて少ない。それが、現代の日本人の一般的な姿といえるのかもしれない。日常を心豊かに過ごすための「癒し」が社会のニーズの中心に置かれ、思想的に偏りを持たず生きるというのが普通の人々の有り様にも思われる。

しかし、いくらでも消費や実践が可能である代わりに、どのスピリチュアリティにも決定的な永続性と絶対性は存在しない。一生信じるに足る何かや、唯一無二の完全さと共にある「安心」というのは、そこには設定されないのである。精神の支柱となる思想、哲学、あるいは宗教的な存在なしで、幸福感は維持し得るのだろうか。スピリチュアリティを実践している当事者や愛好して消費する人々、いわゆるスピリチュアリストたちは、「宗教」についてどのように考えているのだろうか。それについて、島藺進は、以下のように特徴づけている。

新しいスピリチュアリティに関心をもつ人々は、堅固な体系性、組織性をもった伝統的な宗教に好ましくない性格があると考えている。そうした「宗教」の特徴は、(1) 集団への帰属を求め、集団の規範や権威体系に服するよう促すこと、(2) キリストやブッダのような唯一の至高の人間、あるいは神的超人的な存在への帰依を求めること、(3) 自己が属する宗教のみが正しく他の宗教や思想的立場は無価値であるかごくわずかな価値をもつにすぎないとする独善的・排他的な姿勢、(4) 神などの超越的存在による死後の報いを説き、信じないものが罰せられるとする二分法、などである。

(島藺進「救済からスピリチュアリティへ：現代宗教の変容を東アジアから展望する」、127-154 頁)

以上について、説明を加えていきたい。スピリチュアリストがもっとも忌避するのは、(1) の集団性といえる。現代人にとって、「スピリチュアル」とは身近に実践できる個人的な癒しの体験である。自分だけで自由気ままに精神世界を堪能したいというのがニーズの根底にあるため、宗教集団の一員となって横並びの信仰を押しつけられるのは、目的的には本末転倒の極致となる。たとえば、「毎日会社に行くのが苦痛。だから、週末は気分をリセットするために、ヒーリングを受けたり、パワースポット巡りを楽しんだりする」というスピリチュアリストたちは珍しくない。彼らにしてみれば、集団での宗教活動は新たな義務や心理的な負担を増やすだけである。

まして、宗教団体が大規模化、組織化されているほど階層区分が生じる。そこには、幹部や世話役や上級者が存在しており、出世や上達や抜擢による上下関係と、上を目指すための派閥形成や抗争も生まれてくる。それでは、普段身を置く日常環境となんら変わらないものになってしまうだろう。もともと、スピリチュアリストは、非日常感と霊的体験を求めているのである。抑圧やストレスを生み出すような新たな組織に組み込まれることは、スピリチュアリストが求める癒しのニーズとは合致しない。

(2) の超越者に関して、スピリチュアリストたちの理解はかなり柔軟であるといえる。キリストやブッダばかりか、聖母マリア、マイトレーヤ（弥勒菩薩）、ソロモン王、クワンイン（観音菩薩）、サナト・クマラ、大天使ミカエルなど、スピリチュアリティの場面では、あらゆる至高存在が「指導霊」や「守護霊」になり得ると考えられ、枚挙にはいとまがない。およそ神話的な存在であれば、すべてが精神世界のセッションに召喚され得るのである。しかし、スピリチュアリストたちにとって、いずれの至高存在も、けっして絶対的ではない。それは「今、この場」で必要なメッセージやパワーを与えてくれる「聖なるパワーの発信者」に過ぎない。超越的存在への信心はその場限りのものでよしとされ、心より帰依すべき義務は生じないのである。

(3) の排他的姿勢に関しては、(2) で述べたように、もともとスピリチュアリティが特定の信仰に特化したものではないため、他に対して否定や批判をする必要が生じない。元来、宗教の核とは「信」にあり、伝統宗教はその大半が特定の教義・教祖・超越的存在への帰依に基づくものである。そのため、「これ以外は邪道である」とか「真理はここにある」という姿勢を崩せない面がある。そのような絶対性の設定は、スピリチュアリストにとっては、縦横無尽に精神世界を楽しむのを阻む以外の何ものでもない。スピリチュアリティの現場では、どこにでも、何にでも「真理」や「神秘」を見出せる人ほど優れていると評価される傾向がある。特定の信仰に執着する独善性、他への排他性は、むしろ「広く神秘を理解する能力」の欠如ともとらえられかねないのである。

(4) の、死後の報いと罰に関する二分法も、スピリチュアリティにおいては、度外視されがちな要因である。スピリチュアリティには、「前世」に関する情報を扱うヒーリングやチャネリングも数多く見受けられるが、そこにネガティブな意味づけはほとんどされない。罪や罰という概念は、「癒し」を目的とするスピリチュアリティにはそぐわないものである。スピリチュアリティにおいて、前世、現世、来世という時の連なりは、魂や意識が次元的に向上していく時間経過、あるいは学びのステージの進化としてとらえられる。スピリチュアリストにとって、魂は向上し続けるものであり、来世の生まれ変わりも、意識が高次元へと進化するための場と想定される。

スピリチュアル・セラピストがクライアントと対面するセッションでも、超越者たちは限らないパワーを注いでくれる良きエネルギー源といった存在であり、それらが人の魂を審判する役割を担うことはない。従って、信仰がなければ罰を下されるという制約的要素は排除され、心から帰依する覚悟も必要とはされないのである。

こうしてみると、スピリチュアリティは宗教体験のいいところ取りに過ぎないといえる。しかし、そこには、現代の日本人が「宗教」を忌避する理由も示されるのである。スピリチュアリティ領域に含まれる事々は、いずれも「信仰対象の限定、信仰心の永続性、修行の義務化」を拒否する。それは、これまでの伝統的な宗教に対するアンチテーゼと考えられるだろう。現代人の、精神世界に寄せる心情、聖なるものとの接点を求める心は、排他的かつ義務的な要素を一掃したところに向かっている。この点を無視したのでは、現代の人々にとっての「癒し」や「安心」を理解することはできないのである。

3. 代替としてのスピリチュアリティ

「信」を核とする思想の仕組みを考えれば、いずれの宗教活動にも何らかの義務が伴うのはやむをえない。しかし、それによって、伝統的な宗教は、現代の人々には忌避されがちな存在となってしまう。「信」によって得られる救いよりも、「信」に帰依することの負担のほうが大きくなりつつあるというのが、現代の宗教活動に対する感覚といえる。

とはいえ、日本人は古来よりあらゆるものに「霊性」や「神聖なるもの」を見出したがる民族であり、神秘の力に依拠する心情傾向は、今もって失われないままである。その結果、スピリチュアリティという宗教に代わる存在が、クローズアップされてきたのだといえよう。スピリチュアリティは宗教ではない。しかし、既存の宗教が有する「好ましくない性格」を排除した、宗教の代替的存在として認知されるようになったのである。

では、スピリチュアリティならではの意義と考えられるものはないのだろうか。

スピリチュアリティ全般に見られる特徴をあげるならば、以下のようなものである。

- ①現実的な「今このとき」を主眼に置き、今生での気づきを重視する。
- ②目的は「救い」ではなく、「癒し」や「幸福」である。
- ③重要なのは、気づきという「知」であり、「信」に至る必要はない。

これらは、「スピリチュアリティ」全般に通底する重要なことがらである。それは、現代の日本人のニーズに適合しやすい精神世界の条件といえるだろう。

「はたして、精神の支柱となる思想、哲学、あるいは宗教的な存在なしで、幸福感は維持され得るのか」という問いに対しては、スピリチュアリティがもつ精神世界への取り組み方を再確認する必要がある。

4. 現実世界と精神世界の並立

スピリチュアリティの最大の特徴は、その柔軟さにある。信仰に伴うあらゆる制約は取り除かれ、誰でもが聖なる世界と俗なる世界を自由に行き来できる。その可能性を全肯定することがス

スピリチュアリティの基本といえる。

かつての自然崇拝から生じた素朴な信仰は、目に見えない次元と人間を共存させていた。自然界に見出される異界や聖なるものの存在は、人にとって現実生活とも縁続きのものであり、神秘も今より身近な出来事であった。たとえば、浄土真宗の救済論のように、仏教思想は観念的に「来世」や「浄土」や「超越者」を設定して、独特の神話的世界を成立させた。中世期には、こうした神話的要素が、人々の心の支えになり得たのである。

近代に入って科学的思考が発達すると、神話はことごとくリアリティと説得力を失うことになる。不可知な存在をすべて在るものとして許容しようとする観点は、近代的な精神に耐えうるものではなくなったといえる。神話的な信仰世界は一種のファンタジーであり、それだけでは生きていけない現実というものが存在する。しかし、現実世界をリードする科学的物質主義にも限界があつて、それが必ずしも人の幸福に結びつくものとはいえなくなってきた。徹底的に神を信じて信仰に身を捧げる生き方も、科学で証明できないものを一切排除して数値とデータのみに生きるのも、どちらも「歪つな生き方」であると、人々は認知し始めている。

人は、けっして科学的な実証主義のみで生きられるわけではない。科学技術が発達すればするほど、解明しきれない未知の領域も拡大していく。人は、この先も、制御不可能な宇宙や自然を畏怖し、豊かさによって際限が無くなる一方の、新たな煩惱とも向き合うことになるだろう。人に「心」という未解明で不可知なものが存在する限り、「目に見えないもの」は無くならず、「神秘」や「神聖なるもの」も創出されることになる。

新世紀を迎えて、人々の精神世界との関わり方は変化しつつある。普段は神聖さや神秘とは無縁な感情で生活しても、安らぎや癒しのため、悩みからの脱出が必要なときには、スピリチュアリティの世界観に基づいて過ごす。その際には、失われつつある神話的ファンタジーや不可知なものとの接点を、すべて良い体験として受けとめるのである。このように、目に見える世界と目に見えない世界の両方を、矛盾なく受け入れて、精神的に自由自在に行き来をすることが、いま現代の日本人の「安心」に適するやり方である。「見えるものと見えないもの」、あるいは「俗と聖」を同時に受け入れる自由な感性、それを身につけることにより、人は時代に合った幸福感を獲得しようとしている。スピリチュアリティは、そうした自由展開の申し子ともいえる新思想である。

近年、全般的な傾向として、バーチャル（仮想）とリアリティ（現実）の混在が叫ばれる。あらゆるものは、データやコンテンツとしてデジタル化され、マルチメディア的に展開される。現実世界と仮想世界が、矛盾無く同時に存在しているという感覚は、ここ十数年来で加速度的に強められた感がある。たとえば、手に取ることができる貨幣や紙幣と、ウェブ上でデータ管理された資産が、等しく「お金」であるように、実像と虚像の価値観が同時に並列するのを理解するのである。もはや、人々は、現実か非現実かの二元論には陥らない。精神世界への関わり方にも、このような同時並列的な現象が起こっているといえる。

かつて、人が求めた「聖なるもの」との関わり方は、統合や一体化を目指すものであった。人が修行や鍛錬により超越者に近づくこと、あるいは超越者が慈悲を差し伸べること、そのいずれも求めるところは同じである。究極への到達とは、絶対的な真理にたどり着くことであり、唯一無二を知ることには他ならない。しかし、現代人にとって、真理と一体化を図ることはあまり重要な意味をなさない。すでに述べたように、絶対的な価値に偏る生き方は、もはや息苦しく耐え難いのである。

現実と非現実のハイブリッド（混合）化、あるいは並立的観点の実践ともいえる新たな思想のスタイルが、いま現在の日本人が求めるものであり、それこそがスピリチュアリティが提供し得る意義といえるのではないだろうか。

5. 越境する精神世界

最後に、改めて「靈性」について、鈴木大拙の言葉を引いてみたい。

靈性と云ふのは、末那識（マナス）の上において生じたる転回後の働きである。今までは知性の分別面ばかりを見てゐて、内には我執を養ひ、外には煩惱増進の機会のみを作つた。それで、地獄や極楽の夢を見て、悩みの種を蒔いてゐた。ところが、ここに百八十度の大転回が行われた。それからは今まで見てゐた感覚の世界がもとのものでなくなつた。なるほど、旧に依りて烏は黒く鷺は白いが、その白黒が白黒でなくなつた。併しそれは一味平等の無差別になつたと云うのではない。さう云へば、それは知性上の分別を出ないであらう。転回後の末那識はもはや六識の緊縛を受けぬ、却つてこれを頤使（いし）するのである。自由創造の世界が進展して来た。これが法界である。これが極楽である。法界と云ふと形而上学的に無色のように見られ、極楽と云ふと濃厚な極彩色 が伴ふ。本質的には同じものである。

（鈴木大拙『鈴木大拙全集』第六卷、78頁）

「烏は黒く鷺は白いが、その白黒が白黒でなくなつた。併しそれは一味平等の無差別になつたと云うのではない」というのは、言い換えれば、俗は俗、聖は聖であれども、その相違はなくなつた。しかし、それは俗と聖がまったく同等の質に見なされるというわけではない、ということであらう。

また、「自由創造の世界が進展して来た。これが法界である。これが極楽である。」というのは、現実と精神とが自由に認識され、創り出される世界のことを、最良の結果として指すものといえる。

上記に続くのは、以下の言葉である。

極楽と娑婆と互に相映出して、而も、娑婆は娑婆、極楽は極楽で、各々その分を守つてゐ

るということは、華嚴の法界観である。

(同上、78-79 頁)

「極楽と娑婆」とは、スピリチュアリティにおける非現実と現実であり、神秘とのふれ合いと神話の否定であり、聖と俗である。そこに矛盾や葛藤を持ち込まないで、それぞれを生き切るというのは理想的なことであろう。

現代の日本には、鈴木大拙のいう「靈性」の兆しが見えつつあるのかも知れない。それは宗教的体験ではあるが、「信」による宗教とは異なる思想によってはじめて可能になるものである。

スピリチュアリティは、まだ確固とした存在ではなく、心許なくもあやうい一時的な風潮に過ぎないのかも知れない。時代の変遷により、この先長く残ることになるか、廃れて消え去るのかも、まだ不明な存在である。あてもなく多様化した精神世界の揺り戻しとして、この先、強力な一神論が出現しないとも限らないだろう。日本の精神世界史は、まだまだ変容の過程にある。

しかし、スピリチュアリティを通じて、精神世界に向かう新たな潮流が、現代の日本人に生まれたのは確かである。スピリチュアリティは、あらゆるカテゴリー、あらゆる思想を飛び越え、仮想と現実の枠組みをも越境する。その柔軟さは、現代の人々に「癒し」をもたらし、目に見えない「聖なるもの」との接点を与えてくれる。こうして、自然崇拜的な感性に仏教的ファンタジーが加わって培われた日本人の精神性は、科学による神秘主義の否定を受けとめつつ、また不可知なものへと向かおうとしている。

【注】

- (注1) 『広辞苑 第六版』(1516 頁)では、「スピリチュアル (spiritual)」は、「①精神的。靈的。宗教的。②アメリカの宗教的な民衆歌曲。白人靈歌・黒人靈歌・ゴスペル・ソングなど。」とされ、『朝日新聞』(2011 年 11 月 23 日朝刊)によれば、広辞苑における「スピリチュアル」の初出は 1998 年発売の第五版であり、2008 年の第六版で「宗教的」が加えられた。また、最新刊の『現代用語の基礎知識 2014』(1374 頁)では、「スピリチュアル (spiritual)」は、「精神の。靈魂の。また、黒人靈歌 (ニグロスピリチュアル) のこと」とされる。いずれも、現在の日本で各媒体に取り上げられるブームや現象についての記述は見られない。
- (注2) 2004 年、占い師の細木数子が出演するテレビ番組「ズバリ言うわよ！」(TBS 系)がヒットする。翌 2005 年には、「オーラの泉」(テレビ朝日系)が放送開始され、江原啓之と美輪明宏が、ゲストの前世やオーラを霊視するというスタイルが話題となる。ちなみに、松村潔『精神世界の教科書』(287 頁)では、オーラとは、「あらゆる物質を取り巻いているエネルギー場のこと。〔中略〕その色や形、大きさがその人の精神・肉体の状態を表している」とされる。
- (注3) 『現代用語の基礎知識 2014』(1363 頁)では、「チャネリング (channeling)」は、「チャンネルを合わせること。宇宙や霊との交信。」である。チャネラーとは、それが可能な人を指す。
- (注4) 『宗教学事典』(596 頁)では、「癒し・ヒーリング」は、「西洋医学の枠内にはおさまりきらない、あるいは近代合理主義的な学問とは異なった世界観をもっているようなわざや実践が、何らかの回復効果を引き起こしたと主観的に感じられるときに、癒しやヒーリングであると認知される」と解説される。ヒーラーとは、このような効果を引き起こせる人を指すものである。
- (注5) 有元裕美子『スピリチュアル市場の研究』, 52 頁
- (注6) 同上, 52-53 頁
- (注7) WHO 憲章前文の「健康の定義」の一文に、「スピリチュアル (spiritual)」と「ダイナミック (dynamic)」

という二語を加えるという提案が議論されたが、結果としてこの定義改訂問題は総会では否決され、その後、事務局長預かりとして調査が行われた。しかし、その後の展開については、安藤（2006）では、スピリチュアリティの「概念の標準化を目指すような試み（たとえば WHO によるそれ）がおおむね挫折せざるを得なかった」とされる。

- (注8) 弓山（2010）によれば、1995年の阪神淡路大震災、オウム真理教による地下鉄サリン事件を通じ、1990年代後半、日本の文教行政において、スピリチュアルな側面が強調され、「生きる力」の涵養が叫ばれるようになった。中教審は「生きる力」の根拠を伝統的価値、すなわち宗教的情操に見出そうとした。2002年10月31日の中教審答申の中間報告案では、「科学・物質万能の風潮の中で、目に見えないものを大切にするという観点から、あらゆる宗教に共通する普遍的な宗教心を教える必要がある」、「道徳教育の背景として宗教的情操の涵養が必要である」と宗教情操の必要性を示唆した。これは各界からの反発を招き、中教審は最終答申で、「国立学校における特定の宗教のための宗教教育や宗教活動の禁止が適当」とした上で、「宗教的情操に関する教育として、道徳を中心とする教育活動の中で、様々な取り組みが進められている」と結論づけた。この2002年度は「ゆとり教育」が本格始動した年とされ、文科省より「心のノート」と呼ばれるワークブックが全国の小中学校に配布される。この「心のノート」五・六年生版では、「大いなるものの息づかい」「不思議な摂理」「目に見えない神秘」「人間の力を超えたもの」の文言があるとされる。これらは具体的な宗教とは結びつかないが、スピリチュアリティ領域に見られる概念と共通している。
- (注9) トランスパーソナル心理学について、『心理学辞典』（642頁）では、「心理学の一分野として、1960年代に創始され、行動主義、精神分析、人間性心理学につぐ第四の勢力と見なされる。人間のより健康な側面を追求する人間性心理学と東洋思想・神秘主義・シャーマニズムの普遍的な意味をも統合することを意図している。トランスパーソナルとは文字どおり個々の精神にまたがるあるいは超えることであり、通常の自我境界を越えた意識の広がり、さらには至高体験、宇宙意識のような超正常の体験領域をも包含する」との解説がある。
- (注10) 伊藤雅之・樫尾直樹・弓山達也『スピリチュアリティの社会学』、i 頁
- (注11) 小池靖「ニューエイジとセラピー文化：文化論の視点から」、『宗教と社会』、137 頁
- (注12) 伊藤雅之『現代社会とスピリチュアリティ—現代人の宗教意識の社会的探求』、ii 頁
- (注13) 伊藤雅之・樫尾直樹・弓山達也編『スピリチュアリティの社会学』、14 頁
- (注14) 島薗進『スピリチュアリティの興隆 新霊性文化とその周辺』、v 頁
- (注15) 同上、v 頁
- (注16) 同上、vi 頁
- (注17) 同上、311 頁
- (注18) 同上、311 頁
- (注19) 弓山達也『日本におけるスピリチュアル教育の可能性』、553 頁
- (注20) 鈴木大拙『日本的霊性』、17 頁
- (注21) 同上、19-20 頁
- (注22) C+F Communications 編『別冊宝島 16 精神世界マップ』、12 頁
- (注23) 参考：C+F Communications 編『別冊宝島 16 精神世界マップ』、6-7 頁
- (注24) ヘレン・パーマー／鈴木秀子訳『エニアグラム—職場で生かす「9つの性格」』では、エニアグラムは「何百年もの歴史をもった秘伝の性格定義」（同7頁）とされる。訳者によれば、イスラム世界を行脚していたロシアの神秘家ゲオルギ・グルジフが、スーフィーのエニアグラムを修めて西欧社会にもたらした。1980年代、エニアグラムは、米国スタンフォード大学を中心に体系的に研究され、現在では諸大学の経営学講座で必須科目となっているとの解説がある。
- (注25) 古代の神道では、神社の社殿の中に神を祭る以外に、祭の時にも神を招く。その際、巨木の周囲に玉垣をめぐらして注連縄で囲うことで神聖性を保った。古くはその場所を神籬（ひもろぎ）と呼ぶ。次第に祭りも社殿で行われるようになったが、古い形の神社では、建物の中に玉垣を設けて常盤木（常緑樹として榊など）を立てて神の宿る所として祭った。後に、この常盤木を神籬と呼ぶようになり、現在では、神籬は地鎮祭などで用いられる。

(注26) 磐座（いわくら）とは神の御座所を指す。自然の巨石をいう場合が多い。山に対する信仰、火（火山）に対する信仰である三輪山や富士山などの神名火（カムナビ）、滝などから、風雨・雷という気象現象までの多岐に渡るものである。

(注27) 来宮神社 HP <http://www.kinomiya.or.jp/ookusu.html>（閲覧日 2012/11/19）

(注28) 「NPO PLANT A TREE PLANT LOVE」HP 宮脇昭「木を植えるー21世紀の鎮守の森を目指してー」
<http://www.plantatree.gr.jp/academie/essay-miyawaki-akira-01.html>（閲覧日 2012/11/19）

【参考文献】

- ・『広辞苑 第六版』岩波書店、2008 年
- ・『現代用語の基礎知識 2014』自由国民社、2014 年
- ・『朝日新聞』朝日新聞社、2011 年 11 月 23 日朝刊
- ・『宗教学事典』丸善、2010 年
- ・有元裕美子『スピリチュアル市場の研究』東洋経済、2011 年
- ・マギー・ハイド／鏡リュウジ訳『ユングと占星術』青土社、2013 年
- ・樫尾直樹『スピリチュアリティを生きる』せりか書房、2002 年
- ・伊藤雅之、樫尾直樹、弓山達也編『スピリチュアリティの社会学』世界思想社、2004 年
- ・小池靖「ニューエイジとセラピー文化：文化論の視点から」『宗教と社会』(6)、2000 年
- ・弓山達也「日本におけるスピリチュアル教育の可能性」『宗教研究』84(2)、2010 年、553-577 頁
- ・伊藤雅之『現代社会とスピリチュアリティー現代人の宗教意識の社会学的探求』溪水社、2003 年
- ・島藺進『精神世界のゆくえ』秋山書店、2007 年
- ・島藺進『スピリチュアリティの興隆 新霊性文化とその周辺』岩波書店、2007 年
- ・島藺進「救済からスピリチュアリティへ：現代宗教の変容を東アジアから展望する」『宗教研究』84(2)、2010 年、331-358 頁
- ・葛西賢太「精神世界を支持する〈ゆるやかな共同体〉」『宗教と社会』(4)、1998 年、129-152 頁
- ・安藤泰至「越境するスピリチュアリティ 諸領域におけるその理解の開けへ向けて」『宗教研究』80(2)、2006 年、293-312 頁
- ・鈴木大拙『日本の霊性』岩波文庫、1972 年
- ・C+F Communications 編『別冊宝島 16 精神世界マップ』JICC 出版局、1980 年
- ・ヘレン・パーマー／鈴木秀子訳『エニアグラムー職場で生かす「9つの性格」』河出書房新社、1998 年
- ・松村潔『精神世界の教科書』アールズ出版、2012 年
- ・中島義明、他編『心理学辞典』有斐閣、1999 年
- ・星野英紀、他編『宗教学事典』丸善、2010 年
- ・岡部隆志『シャーマニズムの文化学 日本文化の隠れた水脈』森話社、2001 年
- ・宮脇昭『鎮守の森』新潮文庫、2007 年

【web サイト】

- ・「来宮神社」HP <http://www.kinomiya.or.jp/ookusu.html>、閲覧日 2012/11/19
- ・「NPO PLANT A TREE PLANT LOVE」HP 宮脇昭「木を植えるー21世紀の鎮守の森を目指してー」
<http://www.plantatree.gr.jp/academie/essay-miyawaki-akira-01.html>、閲覧日 2012/11/19